

論文番号 49

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Beneficial effect of moderate alcohol consumption on vascular disease: myth or reality?

中等量アルコール消費の血管病に対する良い効果：神話か現実か？

執筆者

JA Papadakis, ES Ganotakis, DP Mikhailidis

掲載誌 (番号又は発行年月日)

The Journal of The Royal Society for The Promotion of Health; 2000,120(1),11-15

キーワード

Alcohol, cardiovascular disease, haemostatic variables, iachaemic heart disease, lipids, peripheral vascular disease, stroke

要旨

週に 5-6 日の日に 1-3 単位の中量飲酒は、血管病の罹患率および死亡率に対して好ましい効果がある。特に虚血性心疾患に対してはそうである。この、心臓を守る効果は HDL コレステロールや血小板凝集能の抑制といった心臓病の危険因子に対する直接の効果かもしれない。なぜなら、HDL コレステロールは虚血性心疾患を防ぎ、血小板凝集能が亢進すると、心臓発作が起こるからである。

これとは対照的に、アルコール依存症者と問題飲酒者は虚血性心疾患やおそらくは脳卒中での死亡率が高い。過剰なアルコール摂取は血圧を上げるかもしれない。アルコールの乱用が続くと、アルコール性心筋症になる可能性がある。アルコールは西洋社会では非虚血性心筋症の主要因である。

赤ワインが他のアルコールより健康にいいと広く信じられているが、いくつかの研究ではそうであるとは言えない。